

2022年10月20日

最高裁判所 第三小法廷

裁判長裁判官 長嶺 安政 殿

裁判官 宇賀 克也 殿

裁判官 林 道晴 殿

裁判官 渡邊 恵理子 殿

裁判官 今崎 幸彦 殿

事件番号：令和4年（才）第900号、令和4年（受）第1134号

諫早湾干拓問題において有明海異変の根本的な解決を求める要望書

日本ベントス学会自然環境保全委員会

委員長 佐藤 慎



日本ベントス学会自然環境保全委員会は、福岡高等裁判所裁判官へ2020年6月29日に「諫早湾干拓事業の常時開門確定判決無効化の見直しを求める要望書」、2021年5月26日に「諫早湾干拓問題の和解協議において根本的な解決を求める要望書」をそれぞれ提出しました。これらの要望書では、「令和元年（ネ）第663号請求異議控訴事件」に関して、2010年の確定判決以降の有明海における環境と生物の変化について幅広く科学的データを収集した上で、多角的な視野から有明海異変の根本的な解決を目指して審理されることを要望しました。

さらに本委員会では、要望書の提出以外にも、最新の有明海研究を取り上げた特集を日本ベントス学会誌で公表してきました。これらの研究論文では、諫早湾潮受け堤防の締め切りが有明海の潮流に影響を与え、赤潮の頻発や大規模な貧酸素水の発生をもたらしたこと（資料1：堤2019、資料5：堤2021）や、干拓調整池からの排水が潮受け堤防外側の海域生態系に悪影響を及ぼしたこと（資料2：高橋2019）などが研究成果として示され、これらの有明海における環境変化が近年の漁獲量減少の主な原因である可能性が高いと指摘されています（資料5：堤2021）。

また、過去25年間に毎年蓄積された定量データから、有明海の魚介類の主要な食料となるゴカイ類やヨコエビ類などの底生動物（ベントス）群集は、諫早湾干拓調整池や堤防外側の諫早湾口から有明海奥部海域だけでなく、有明海湾口部までの全域において1997年の潮受け堤防締め切り後に生息密度が減少し、それが2002年の短期開門調査で一時的に増加しましたが、短期開門終了後は2010年の確定判決を経て現在に至るまで底生動物群集の回復傾向はまったく見られていないという観察事実が示されています（図1, 2, 資料1：佐藤・東2019, 資料3：佐藤ら2020a, 資料4：佐藤ら2020b）。

これらの長年にわたる継続的な研究成果は、諫早湾潮受け堤防の締め切りや短期開門が諫早湾周辺にとどまらず、有明海全域の環境と生物相に影響を及ぼしたことを明示し

ています。これは、福岡高等裁判所の判決文に書かれている確定判決後の漁獲量の増加傾向とは相容れない観察事実であり、このままの状態では有明海における海洋生態系の回復は望めません。また、干拓調整池の底生動物相は、堤防締め切り後に多くの海産種が消滅し、その後はわずかな日和見種のみが高密度で生息しましたが、短期開門終了後はそれらの種も見られなくなり、2010年の確定判決後も現在に至るまでイトミミズ類とユスリカ幼虫などが生息する場所となっています（図2、資料3：佐藤ら 2020a）。福岡高等裁判所の判決文では、調整池で新たに形成された生態系への考慮が必要とされていますが、現地で実際に観察された底生動物相の衰退とはまったく相反する状況です。

一方、2002年4-5月に実施された短期開門では、27日間の海水導入により、調整池や有明海奥部海域において、底生動物が一時的に増加したことが明らかになっています（図1、2、資料1：佐藤・東 2019、資料3：佐藤ら 2020a）。これらの事実は、調整池への海水導入が、短期開門終了後に実施されてきた海底耕耘や覆砂などの対症療法的な対策に比べて、はるかに即効性のある有効な手段であることを明確に示しています。

これらの研究成果の論文別刷（資料1-5）を参考資料として添付します。貴裁判所におかれましては、様々な研究分野の学術的な知見を踏まえて、諫早湾干拓問題において有明海異変の根本的な解決を目指していただきますようお願いいたします。

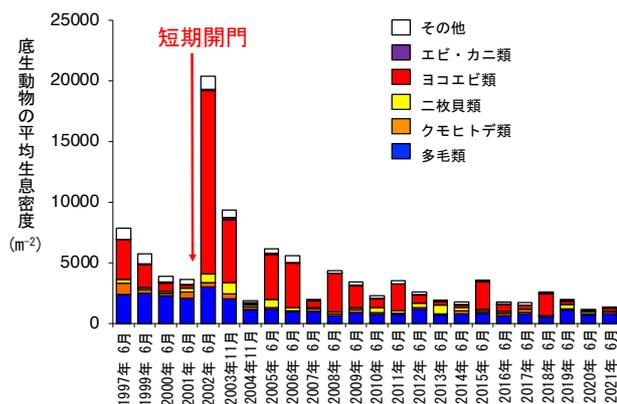


図1. 有明海奥部 50 定点における 1 m² 当たりの底生動物の高次分類群別生息密度の経年変化（1997～2021年）。佐藤・東（2019）を改変。

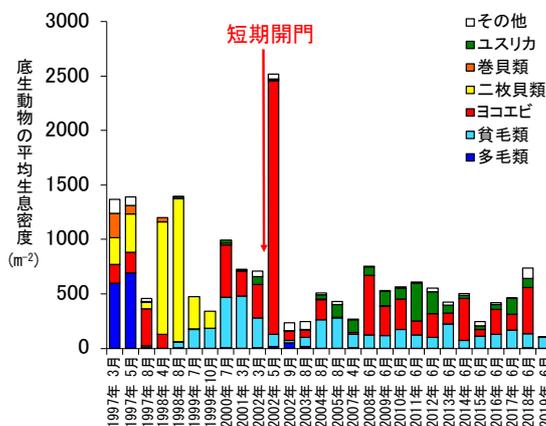


図2. 諫早湾干拓調整池 16 定点における 1 m² 当たりの底生動物の高次分類群別生息密度の経年変化（1997～2022年）。佐藤ら（2020a）を改変。

添付資料

資料 1

- 佐藤慎一・東 幹夫 2019. 諫早湾潮止め後 20 年間の有明海における底生動物変化. 日本ベントス学会誌 73(2): 120–123.
- 高橋 徹 2019. 潮受け堤防による海域生態系の疲弊に追い打ちをかける調整池排水. 日本ベントス学会誌 73(2): 123–128.
- 堤 裕昭 2019. 有明海奥部海域の環境異変のメカニズムと諫早湾干拓事業の関係. 日本ベントス学会誌 73(2): 128–130.
- 松政正俊・高橋 徹・金谷 弦・木村妙子・折田 亮・佐藤慎一 2019. メーリングリストを利用した諫早湾問題に関するアンケート：実施の経緯と概略. 日本ベントス学会誌 73(2): 131–132.

資料 2

- 折田 亮・佐藤正典・佐藤慎一・近藤 寛・松尾匡敏・東 幹夫・山西良平・Yusof Shuaib Ibrahim・松下 聖・下村真美 2019. 有明海における多毛類 24 種の分布：1997 年・2002 年・2007 年の調査に基づく 10 年間の変化. 日本ベントス学会誌 74(1): 43–63.
- 山中崇希・佐藤慎一・松尾匡敏・佐藤正典・東 幹夫 2019. 諫早湾潮受け堤防閉切り後の有明海全域における水質・底質変化と二枚貝類・ヨコエビ類・多毛類の群集構造変化. 日本ベントス学会誌 74(1): 64–74.
- 大高明史・佐藤慎一・東 幹夫 2019. 潮受け堤防締め切り後の諫早湾干拓調整池における水生貧毛類群集の経年変化. 日本ベントス学会誌 74(1): 75–80.

資料 3

- 首藤宏幸・松尾匡敏・佐藤慎一・東 幹夫 2020. 諫早湾潮受け堤防の締め切り後 5 年間の有明海中央部における底生端脚類群集の変化. 日本ベントス学会誌 74(2): 100–108.
- 近藤繁生・桃下 大・佐藤慎一・東 幹夫 2020. 1998 年から 2018 年までに諫早湾干拓調整池から得られたユスリカ幼虫. 日本ベントス学会誌 74(2): 109–114.
- 佐藤慎一・東 幹夫・松尾匡敏・大高明史・近藤繁生・市川敏弘・佐藤正典 2020a. 諫早湾干拓調整池における水質・底質ならびに大型底生動物群集の経年変化. 日本ベントス学会誌 74(2): 115–122.

資料 4

- 佐藤慎一・東 幹夫・山中崇希・依田優介・松尾匡敏・佐藤正典 2020b. 1997–2015 年における有明海全域の底質とマクロベントス群集の変化. 日本ベントス学会誌 75: 54–64.

資料 5

- 堤 裕昭 2021. 有明海の赤潮頻発に端を発する生態系異変のメカニズム. 日本ベントス学会誌 76: 103–127.

本件の連絡先

日本ベントス学会自然環境保全委員会諫早湾問題検討委員
佐藤慎一（静岡大学理学部地球科学科教授）
〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836
Tel: 054-238-4791 e-mail: sato.shinichi.c@shizuoka.ac.jp